令和４年度　学校自己評価書

《学校経営計画》

名張市立錦生赤目小学校　　学校長　林　辰久

赤目中学校区教育目標　　一人ひとりが生き生きと輝く児童・生徒の育成

めざす児童像・生徒像　　なかまと繋がりあって、学ぶ楽しさや自己有用感を育むことができる児童・生徒

１　学校教育目標

お互いの人権を認め合い、主体的に考え行動する　心豊かな子の育成

２　めざす学校像、幼児・児童・生徒像、教職員像、保護者・地域像

○学校像	◆　誰もが安心してすごせる学校 ◆　子どもたちが学校に行くことを楽しみにする学校 ◆　教職員が働く喜びを実感できる学校 ◆　保護者・地域と共にある学校
○児童像	(1)　基本的な生活･学習習慣を身につけ、意欲をもって自ら学び、確かな学力を身に付ける子 (2)　差別を見抜き、差別をなくしていくために、自他ともに尊重できる子 (3)　命を大切にし、健康で生き生きと活動する子
○教職員像	(1)　児童理解を基盤とし、子どもに対する愛情や責任感をもつ教職員 (2)　常に学び続ける向上心と、改善に努める教職員 (3)　教育の専門家としての確かな力量と、豊かな人間性をもつ教職員 (4)　互いに支えあい、認め合い、組織的に取り組む教職員 (5)　保護者や地域住民の期待に応え、信頼される教職員
○保護者・地域像	(1)　学校と連携して子どもを育てる保護者（共育） (2)　子どもたちを温かく見守り、学校と連携することで、教育効果を高める地域（郷育）

３　学校の現状

	児童	教職員	保護者・地域
強み	･明るく素直で、友だちと協力して活動することができる。 ･学年の枠を超えて、誰とでも仲良く接することができる。	･すべての教職員で、子どもたちの豊かな学びと育ちに向けて取り組もうとする。 ･安心して学習に取り組める環境づくりに向けて、改善を図ろうとする。	･学校の教育活動を支援してくれる保護者･地域、ボランティアの活躍がある。 ･地域で子どもたちを育てる意識の共有が広がっている。
弱み	･時間やルールを守ることなど、基本的な生活習慣や学習規律が十分に身についていない。 ･自尊感情が低かったり、様々な不安を抱えたりしている子どもたちが少なくない。	･「生きる力」の育成を見据えた授業力の向上を目指す必要がある。 ･ライフワークバランスを意識した働き方を実践する必要がある。	･保護者同士のつながりのさらなる拡大や深まりをすすめる必要がある。 ･地域における子ども支援の取組の充実を図る必要がある。

本年度の改善方策

○　子どもたちに基本的な生活習慣や学習規律を身に付けさせ、確かな学びを実現するとともに、自他のよさを認め合い、豊かな心を育む教育を推進する。

○学校教育目標の具現化にむけ、すべての教職員が一致協力して、組織的･計画的な学校経営、学年･学級経営を進める。

○　子どもたちにとって魅力ある地域づくりにむけて、保護者・地域との連携を深め、信頼される学校づくりを推進する。

４　重点的な取組事項

番号	内容	実施期間 2	3	4	5	6
1	子どもたちに基本的な生活習慣や学習規律を身に付けさせるとともに、自他のよさを認め合い、「学ぶ喜び･わかる楽しさ」を体感させる授業、魅力ある教育活動を展開する。	○	○	◎		
2	すべての教職員が児童理解を基盤とした教育活動を推進し、さらに組織としての力を向上させる取組を充実させる。	○	○	○		
3	子どもたちが「地域を愛し、今後も住みつづけたい」と思えるように、学校・保護者・地域間の相互理解や信頼関係を深める学校づくりを進める。	○	○	○		

５　令和４年度の重点目標

重点的な取組事項－１	子どもたちに基本的な生活習慣や学習規律を身に付けさせるとともに、自他のよさを認め合い、「学ぶ喜び・わかる楽しさ」を体感させる授業、魅力ある教育活動を展開する。

Ａ　今年度の成果目標

①　学校生活が楽しいと感じている児童の割合…９０％(児ア)　【Ｒ３85%　Ｒ２89%】
②　授業がわかりやすいと感じている児童の割合…９４％(児ア)　【Ｒ３93%　Ｒ２93%】
③　自分によいところがあると感じている児童の割合…８４％(児ア)　【Ｒ３83%　Ｒ２84%】
④　自分から進んであいさつしていると感じている児童の割合…８７％(児ア)　【Ｒ３86%】

Ｂ　目標実現に向けた取組　具体的な方策

①「学びと生活の１０か条」を推進するなど、基本的な生活習慣や学習規律を身に付けさせる取組を進めるとともに、子どもたちどうしのつながりが深まる取組を充実させる。

②学力調査等を活用し、本校の強み弱みを分析し、強みの更なる向上を図るとともに、弱みの克服に向けた具体的な授業改善等を、すべての教職員で取り組む。

③自分の良さを知り、友だちの良さを感じられる取組を進めるとともに、子どもたちの人権意識を向上させ、一人ひとりが安心して学べる環境づくりを進める。

④あいさつはコミュニケーションの基本としてとらえ､児童間や先生や地域の人などに自分から進んで挨拶できる児童の育成を図る。

重点的な取組事項－2	すべての教職員が児童理解を基盤とした教育活動を推進し、さらに組織としての力を向上させる取組を充実させる。

Ａ　今年度の成果目標

①学校目標達成に向けて、組織的な取組ができたと感じている教職員の割合…８５％(教ア)【Ｒ３85%　Ｒ２89%】
②児童理解を基盤とした生徒指導や学習指導ができたと感じている教職員の割合…８５％(教ア)【新設】
③　自己目標の実現に向けて、具体な取組を推進していると感じている教職員の割合…８５％（教ア）【新設】

Ｂ　目標実現に向けた取組　具体的な方策

①日頃の取組の情報交換を積極的に進め、特に課題を抱える子どもや特別な支援が必要な子どもについて、「ＯＮＥチーム」としてすべての教職員で共通した指導・支援を行う。

②児童に寄り添い、個々の特徴や傾向などを把握して、「この子のよさは」「この子を伸ばすには」と問い続け、一人ひとりのよさを伸ばし続ける教育活動を展開する。

③自己目標を常に意識した実践を心掛け、改善を図りながら、目標達成に向けた取組を進めていく。

重点的な取組事項－3	子どもたちが「地域を愛し、今後も住みつづけたい」と思えるように、学校・保護者・地域間の相互理解や信頼関係を深める学校づくりを進める。

Ａ　今年度の成果目標

①自分の住んでいる地域が好きだと感じている児童の割合…８５％(児ア)【新設】
②ゲストティーチャー等を生かした教育活動を積極的に進めていると　〃　…９７％(保ア)【Ｒ３97%　Ｒ２97%】
③通信や授業参観などを通じて、教育活動や子どもの様子をよく伝えていると　〃　…９８％(保ア)【Ｒ３98%　Ｒ２99%】

Ｂ　目標実現に向けた取組　具体的な方策

①日頃から地域との連携を密にして、地域の「もの・ひと・こと」に親しみを感じられるような取組を積極的に進める。

②コミュニティ・スクールの趣旨に基づき、授業をはじめとする教育活動に、学校支援ボランティアをはじめ、家庭・地域の方々に積極的に参画いただく機会を進める。

③保護者に学校での子どもたちの様子を見ていただく機会を充実させ､学校だよりやホームページ等で子どもたちの活動を積極的に発信する。

６　学校における働き方改革の推進に向けた取組

上限時間に基づく目標		
成果指標①	１人当たりの月平均時間外労働	２０時間以下　【Ｒ３ 13.2 時間】 （30 時間以下の範囲）
	年 360 時間を超える時間外労働者数	０人　（変更不可）
	月 45 時間を超える時間外労働者の延べ人数	０人　（変更不可）
具体的な方策	・これまで実施してきたグループ研究部会のある水曜日だけでなく、職員会議・研修会・グループ研究部会のない水曜日や、委員会・クラブのない金曜日を、「ノー残業デー」として位置づけ、原則１７時３０分までに退校できるようにする。 ・出張後、本校に帰校することが勤務時間を超えるものについては、原則、直帰することを働きかける。 ・積極的にＳＳＳに業務を依頼する。	
休暇取得促進の目標		
成果指標②	１人当たりの年間休暇取得日数	１２日以上　【Ｒ３ 11 日】 （各学校で設定）
具体的な方策	・各自の年休取得日数の目標を、「昨年度の年休取得日数＋１日」に設定する。 ・効果的・効率的な業務遂行を心がけるために、これまでの前例にとらわれないような行事内容の精選を行う。	
学校独自の取組		
活動指標	設定した日の定時に退校できた職員の割合（教ア）	80%以上
	放課後に開催して 60 分以内に終了した会議の割合	７0%以上
具体的な方策	・効率よく働くための工夫として、出張や年休等、授業を自習にした際のノート指導やテスト・プリントの採点補助を、当該職員以外の教職員で行う。 ・教職員の多忙化、負担感の軽減のための具体的な取組について、定期的に話し合いを設定する。	

《実施結果及び成果と課題》

達成度（定性的評価・定量的評価）の見方	
◎：十分に達成（満足）	95%以上
○：おおむね達成（満足）	85%以上 95%未満
△：達成（満足）せず	85%未満

重点的な取組事項－１	子どもたちに基本的な生活習慣や学習規律を身に付けさせるとともに、自他のよさを認め合い、「学ぶ喜び・わかる楽しさ」を体感させる授業、魅力ある教育活動を展開する。

	達成度		実施結果	成果と課題及び次年度への方向性
A	○		① 学校生活が楽しいと感じている児童の割合…93%（昨年度比△９ポイント） ② 授業がわかりやすいと感じている児童の割合…93%（昨年度比同数） ③ 自分によいところがあると感じている児童の割合…82%（昨年度比▼１ポイント） ④ 自分から進んであいさつしていると感じている児童の割合…（昨年度比同数）	①「学校生活が楽しい」と感じている児童の割合が９３%となり、目標を大きく上回った。学校行事も少しずつ例年通りに開催できるようになってきた。また日々の各クラスでの学校生活が充実していることが大きな要因と考えられる。 ②「授業はわかりやすい」と回答している子の割合は高いが、客観的な数値結果には十分反映していない。結果分析に終わらず、日々の授業にいかに結びつけるかが重要である。 ③毎日の朝の挨拶を元気よくする子が保護者アンケートでは増加している。地域の方からも賞賛してもらっている。委員会でのあいさつ運動や毎朝のボランティアによる声かけも効果的であった。
B	①	△	・「学びと生活の 10 か条」の意識づけが十分できていない。 ・基本的な生活習慣が身についていない児童が少数いる。	・学力向上に向け、学力担当者と教育計画で年間計画を示し、計画的に取り組んでいく必要がある。 ・年度当初、生徒指導担当者と全校児童で学校のきまりを確認する。誰もが毅然とルールが定着できるよう指導していく。
	②	○	・県の学力アドバイザーを招聘し学力調査結果を、研修会で分析した。	・割合では線分図を取り入れる。計算の意味を理解させる。途中の考え方を大切にするなど、弱点を克服するための改善点を意識して日々の授業実践に取り組んだ。
	③	○	・友だちの良さを見つける取組を継続して実施できた。	・学年により取組の差異があるので、効果的な取組を交流し、全校へ広げていく。

重点的な取組事項－２	すべての教職員が児童理解を基盤とした教育活動を推進し、さらに組織としての力を向上させる取組を充実させる。

	達成度		実施結果	成果と課題及び次年度への方向性
A	○		①組織的な取組ができていると感じている教職員の割合…93%（昨年度比△8 ポイント） ②児童理解を基にした指導をしていると感じている教職員の割合…93%（新設） ③自己目標を意識した実践をしていると感じている教職員の割合…100%（新設）	○課題のある児童に対して、児童と向き合い、家庭とも連携して指導できた。各校内委員会なども定期的に随時開催できた。
B	①	○	・特別支援教育校内委員会・教育相談員会・いじめ防止対策委員会・生徒指導推進員会など定期的に開催できた。	・朝の打ち合わせを設定し、タブレットと併用して全職員の共通理解を図った。緊急的な開催は多かったが、生徒指導推進委員会で事実確認また今後の対応について随時話し合いをもち、全職員で取り組む方向性を確認できたのは有効的であった。

	達成度		実施結果	成果と課題及び次年度への方向性
	②	○	・児童理解を進むべき、SST の研修会を開催でき、児童の対応について研修を深めることができた。	・児童を受け入れる姿勢や、教師の言葉がけなどを学ぶ研修会は今後も継続して実施していく必要がある。
	③	◎	・各自設定した自己目標を常に意識して日々の実践が進められたと評価している。	・自己目標以外にも、各分掌や日々の授業での目標など常に PDCA サイクルをまわして改善しつづけるように職員に働きかけていく。

重点的な取組事項－３	子どもたちが「地域を愛し、今後も住みつづけたい」と思えるように、学校・保護者・地域間の相互理解や信頼関係を深める学校づくりを進める。

	達成度		実施結果	成果と課題及び次年度への方向性
A	○		①地域行事に参加していると感じている児童の割合…58%（昨年度比▼１ポイント） ②ボランティアを生かした教育活動をしていると感じている保護者の割合…100%（昨年度比△3 ポイント） ③教育活動の様子をよく発信していると感じている保護者の割合…98%（昨年度比同数）	○地域との連携を密にした学校教育の実践は保護者にも理解され、また子どもたちの豊かな経験や深お学びにつながっている。
B	①	△	・コロナ禍のため、予定されていた地域行事が中止になった。	・開催できた行事の中には、児童が主体となりかかわれたものもあった。今後学校運営協議会において、児童が主体的にかかわれる地域行事開催に向け協議していく。
	②	○	・多くの地域ボランティアの方に教育活動にかかわっていただき、子どもたちの豊かな学びにつながっている。	・多くの地域ボランティアの方に教育活動にかかわっていただき、子どもたちの豊かな学びにつながっている。高齢の方がボランティアを辞退する方が増えてきている。新たなボランティアの人材確保が課題。
	③	○	・授業参観は１回の中止を除き予定通りできた。学級通信や学校 HP での発信も随時できた。	・授業参観の参加率は高く、子どもの様子を伝える工夫を継続していく。マチコミなどで、子どもの安全にかかわる情報をていねいに発信できたことも有効であった。

学校における働き方改革の推進に向けた取組について（成果と課題及び次年度への方向性）	
上限時間に基づく目標	・１人当たりの月平均時間外労働時間（４月から１２月まで）については、13.4 時間となっており、ほぼ昨年度と同様で、目標の２０時間以下を達成できている。また、月４５時間を超える時間外労働者も現在のところ０人であり、教職員が自身の働き方を意識しながら勤務に当たっている。 ・具体的な取組として、グループ研究部会のある水曜日は、ほぼ直帰できている。しかし、職員会議・研修会・グループ研究部会のない水曜日や、委員会・クラブのない金曜日を、新たに「ノー残業デー」として位置づけたが、なかなか帰宅できていない。目標達成の一因となっている。 ・今後も、引き続き、時間外労働時間の削減にむけ、出張後は原則直帰することを呼びかけ、またノー残業デーでの管理職の積極的な声掛けなどを継続し、時間外労働時間の削減に向けた手立てを積極的に検討していくとともに、総勤務時間の縮減にむけて取り組んでいきたい。
休暇取得促進の目標	・１人当たりの年間休暇取得日数は、令和４年１月から１２月までの期間、一人当たり平均１１．３日となっており、目標の１２日以上にはわずかに足りなかった。 ・具体的な取組として、各自の年休取得日数の目標を、「昨年度の年休取得日数＋１日」に設定したことや、年休を取得した場合の子どもへの指導補充や業務補助等を教務が事前に調整していることも一因として考えられる。 ・今後も、引き続き、休暇が取得できやすい職場環境づくりに心がけていきたい。
学校独自の取組	・設定した日の定時に退校できた職員の割合 80%以上の目標値については、達成できていない。グループ研究部会のある水曜日はほぼ直帰できているが、それ以外の日については、残ってしまう職員がいた。 ・放課後に開催して 60 分以内に終了した会議の割合７0%以上の目標値については、達成できていない。小グループでの校内委員会等を含めるとほぼ達成できているが、月１回の職員会議や全体研修会は超過する傾向にある。引き続き、会議内容のさらなる精選と簡潔な提案を進める必要がある。

学校活動全般について
○「学校生活が楽しい」と感じている児童が 93%【昨年度比△9 ポイント】と上がったのは、大きな成果である。日々の学校生活の充実、また授業の楽しさ（よくわかること）がむつびついていると思われる。 ○「子どものよさや努力をよく認め、よくない行動の指導を適切に行っている」と感じている保護者は 91%【昨年度比▼７ポイント】であった。一部の気になる児童が落ち着いていない状況が評価にあらわれている。学校としての一定のルールが確立できず、子どもに迎合し、不明瞭なルールまた指導者によった微妙にちがった対応が指導の一貫性を欠き、保護者に不信感を与えてしまっている。新年度に向け、学校のきまりを整理して、仕切り直しをして、「学校としては○○です。」と誰もが同じ指導、説明ができるようにしていく。子どもにも保護者にも明確なルールを示していく。 ○情報の共有も不可欠である。朝の打ち合わせや、タブレットを使った情報共有など、限られた時間を有効に使って情報共有を図る工夫を進めていく。 ○保護者のアンケート「子どもは家庭や地域の人によくあいさつをしている」84%【昨年度比△8 ポイント】であった。「あいさつ日本一の学校」と表明して、全校で取り組んだことは効果があり、毎朝のあいさつは元気よくできるようになってきている。あいさつ標語づくりで一人ひとりの意識を高めたり、中学校区や委員会と連携したあいさつ運動等も効果があった。 ○学校運営協議会 5 年目を迎えた。これまで築き上げてきた、学校への地域への協力体制は年々かかわりも多くなり、深まってきている。来年度以降 CS カレンダーを基により広く深く多くの地域の方々に子どもにかかわってもらえるような仕組みを構築していく。 ○小中一貫教育の 9 年間の学びが意識された授業が展開されるよう、部会で議論されたことを全職員に還流して、全職員が同じ方向を向いて取り組めるようにする。 ○職員が元気で持てる力を発揮できるよう、働きやすい職場づくりをめざす。日々の声掛けにより、各個人の健康状態に気を配り、疲れが溜まる前に調整や、休みがとりやすい職場の雰囲気や、補欠でみんなが助け合えるようにする。 ○児童・保護者アンケートが、日々の取組の成果が評価できるよう項目を見直し、評価と指導の一体化を図る。 ○来年度の研修については、人権教育総合推進地域事業を人権教育の柱と位置づけ中学校区で進めていく。一方これまで進めてきた算数科の研修については、学力向上を１つの大きな分掌に位置付け、これまでの研修の成果や課題については学力向上の中の１つとして含め継続させていく。